



青木正之・AWSホールディングス社長

にアサインできない。幸い、フィリピンの人は英語が話すことができる。また、日本のエンジニアと他流試合で切磋琢磨することで成長もできる」(青木氏)

人材はフィリピンのトップ3に入る大学の優秀層の理系学生を中心に採用している。春に2000名、秋に2000名という学生が就職にエントリーし、「独立系企業としては人気トップ」(青木氏)に位置するという。結果、年に180人、200名弱がAWSへの入社資格を得る。

その後、フィリピン国内3カ所の研修センターで4カ月学び、日本語と情報処理を学んだ後、AWSの役員の前でビジネスプレゼンテーションを行った

上で入社可否を判断される。まさに「狭き門」である。

「彼らは非常に勤勉。仕事を終えた後、自分でMBA(経営学修士)取得のために勉強したり、宇宙工学を学ぶなど向学心が旺盛」と青木氏。また、親日的な人が多く、インドや中国と比べても転職を繰り返す人が少ないという。しかも単なるプログラマーではなく、プロジェクトを管理する「プロジェクトマネージャー」として育成する。

「オフショア」というと、日本では中国やベトナムの名前がまず挙がるが、青木氏はフィリピンの強みを「IT人材リソースと英語」と話す。中国、ベトナムよりも人件費が安い上、英語は公用語の1つ。ソフトウェアの世界を主導するのはアメリカであり、最先端の技術を学ぶには英語は必須だからだ。

元々、日本IBMと東芝テックの合併でフィリピンでの仕事が始まっただけにIBMとの人的関係は深く、AWSの幹部にも出身者が多い。今後は、国内

外の大手システム会社にもAWSのソリューションを活用してもらおうべく働きかけを続ける。

「幸い、1回お仕事をさせていただけると、リピーターになっていただけることがほとんど。外国人技術者の活用法、進捗管理には自信を持っている」(青木氏)

強みを持つ分野は、自動車の「車載機器のテスト自動化」や、日本の3メガバンクを始めとした「金融システム」、製造業向けの「IoT向けソリューション」、電力やガスなど「インフラシステム」など、まさに日本の根幹を担う企業の仕事ばかり。

他にも少子高齢化の日本を意識した「レセプトチェック」などの医療関連ソフトウェアの開発販売を手掛けている。レセプトチェックの分野では、すでに日本トップクラス。「製薬会社さんやグループ病院に対して、医療ビッグデータを分析・加工して提供するビジネスをスタートしている」(青木氏)

フィリピンでは昨年、政権交代があり、ロドリゴ・ドゥテル

テ大統領が就任。政治的影響はないのか。「我々のビジネスには影響はない。それよりも今、治安をよくする政策を進めていることや、日比間における経済関係の更なる重視、為替バランスを考えると、当社には好影響が期待できる」(青木氏)

青木氏が目指す企業像は、インドの世界的ソフトウェア・コンサルティング企業であるインフォシス。かつては欧米IT企業の仕事を請ける立場だったが、今やIBMやアクセンチュアなどの直接の競合相手になるまでに成長。「我々も日本発の製品を生み出すようになれるように努力していきたい」と力を込める。

オフショアは人件費上昇局面が来た時にどう対応するかが課題。そのためには、自社にどれだけ技術を蓄積できるかが問われる。この2月1日には念願の米国で拠点設立を果たした。今後の成長は、やはりその技術創出の源泉である人材をいかに育成できるにかかっている。

2016年6月マザーズに上場、経常利益率20%を目指す、フィリピンの最優秀人材が集結する会社

自動車関連や金融システムをフィリピン人材で手掛ける AWSホールディングスという会社

昨今、世界中で先端IT人材の争奪戦が激しさを増している。背景には自動運転やIoTなどへの積極的な投資がある。「最先端の仕事を手掛けなければ人は成長しない」と話すのは、AWSホールディングス社長の青木正之氏。2020年までにエンジニア2000名体制を目指す、フィリピンでシステム開発を行う企業だが、扱う分野は自動車の車載機器のテスト自動化や金融システム開発、製造業向けのIoT向けソリューションなど最先端分野。その強みはどこにあるのか――。

本誌・大浦秀和 Text by Ohura Hidekazu

飲食事業で基礎を学び ソフト事業で起業

2016年6月に東証マザーズ市場に上場したAWSホールディングスは、創業から12年が経つ。創業者で社長の青木正之氏は1958年大阪府生まれ。

まずは世界を経験しようと思ったのは、アパレルのワールドの子会社(当時)で、レストランやカフェ事業を展開していたルモンデグルメ。青木氏が手掛けた店舗は全て黒字展開させてきた。その後、親会社ワールドへ転籍して経営陣のもとで働く

中で、今後、どんな事業に可能性があるかに思いを巡らせるようになった。

当時はソフトバンクの孫正義氏が登場するなど情報通信が目された時代。AWSは最初、1993年に日本アイ・ビー・エムと東芝テックの合併会社としてフィリピンで創業された会社が基になっている。青木氏はワールドの中で新規事業子会社の経営を任されたが、「ソフトの時代が来る」として、日本企業のITアウトソーシングをフィリピンで行う事業に可能性を見出し独立。2005年にA

WS(現AWSホールディングス)を設立したという経緯。

フィリピンでは最初、日本IBMのノートパソコン、東芝テックのプリンタ、POSなど組み込みシステムを手掛けていた。平均年齢が日本の46歳の半分(23歳)と人々は若く、人口の増加も見込まれるうえ、ITリテラシーも高い。「そこにリソースとテクノロジを埋め込めば、日本の国益に資する仕事ができるだろうと考えた」(青木氏)

AWSの仕事はシステムやソフトの開発を海外にアウトソーシングする「オフショア」に位置づ

けられるが、手掛ける仕事については、ただフィリピンのコスト競争力を使うだけではなく、最先端のものを手掛けようと考えた。「安い労働力を求めたような下請けの仕事はやらない」と青木氏。なぜなら、プロジェクトの規模が縮小すると仕事が切られてしまう上、安値受注競争に陥ってしまうから。これでは収益が薄くなる上、人材が育たないと青木氏は考えた。

「一つの分野ですつとやっていたら人は育たないし、AI(人工知能)、ロボティクスなど、アメリカ優先で広がる分野